

ページ	該当項目	誤	正
p.11	参考	雌雄間でのみられる現象	雌雄間でみられる現象
p.28	(2)の図	「原形質」と「細胞質」をつなぐ黒線のうち、「真核細胞」と「細胞質」つなぐ部分以外を削除。	
p.29	リボソームの「構造」欄	リボソーム rRN (rRNA)	リボソーム RNA (rRNA)
p.29	「小胞体」の図内	(小胞体内を輸送される物質が含まれている。)	(小胞体内を輸送された物質が含まれている。)
p.32	田部の裏づけ	マトリックス多糖 (※ p.544)	マトリックス多糖 (※ p.18,543)
p.33	図3-1の語句	図内の細胞膜と細胞壁の指しているものを入れ替える。	
p.41	本文中の参照図の番号	図4-6① 図4-6② 図4-6③ 図4-6④	図4-7① 図4-7② 図4-7③ 図4-7④
p.46	もっと広く深く図内	(環状筋) と(縦走筋) を下の説明とともに左右入れ替える。	
p.46	もっと広く深く図内	小腸と輪状に取り囲む	小腸を輪状に取り囲む
p.59	(3)の最後の行	左図の左の	1mol/L の
p.64	図7-14の③	吸水力が△になっている。	吸水力が○になっている。
p.78	図9-3	細胞の突起(微絨毛)	細胞の突起(微絨毛)
p.79	(2)③の参考の2.	微絨毛内のアクチンフィラメントの束は、微絨毛の	微絨毛内のアクチンフィラメントの束は、微絨毛の
p.86	表内「細胞接着の内容」2目	隣接する細胞のアクチンフィラメントの連絡	隣接する細胞のアクチンフィラメントの連絡
p.97	ミミズ(視細胞)の図	ファオゾーム	ファオゾーム
p.102	(5)の参考	(図11-3 上図右の③) は..... (図11-3 上図右の②) は	(図11-3 上図右の②) は..... (図11-3 上図右の③) は
p.108	(2)の図内右上	軸索	樹状突起
p.114	2の文章	軸索が絶縁性.....活動電流は、髄鞘に含まれていない	軸索は絶縁性.....活動電流は、髄鞘に包まれていない
p.115	図内②の語句	Na ⁺ チャネル	Na ⁺
p.116	図12-13右上の語句	シナプス後細胞の軸索末端	シナプス前細胞の軸索末端
p.116	2の(5)の文中	これらの物質を含む。シナプス小胞が、	これらの物質を含むシナプス小胞は、
p.128	Visual Studyの図	<収縮時>のサルコメアの範囲を狭く(灰色の棒の間に)する。	
p.128	Visual Studyの図	図の右下のZ膜から伸びる指示線を灰色の棒を指すように移動。	
p.128	Visual Study下部の文	前繊維に活動電位が発生する。	筋繊維に活動電位が発生する。
p.131	表14-1の中央の参考	3種のトロポニン	3種のトロポニン
p.131	3の(1)	(図14--4 ①)	(図14-4 ①)
p.149	ページ下部④(4)の文中	(図15-10 ④)	(図15-11 ④)
p.156	下部の図内「肺動血」の文中	酸素を多く含む鮮紅色線(鮮やかな赤色)の血液(大動脈・肝動脈などの動脈と、肺から心臓に戻る肺動脈)	酸素を多く含む鮮紅色(鮮やかな赤色)の血液(大動脈・肝動脈などの動脈と、肺から心臓に戻る肺静脈)
p.158	図16-4右上の「房室弁」	動脈から心室へは流れない	心室から心房へは流れない
p.159	表16-1④	「右心室・左心室」の欄: ③と同様	「右心室・左心室」の欄: 弛緩
p.167	(4)の参考の文中	Pa または mmHg (760mmHg = 1013Pa = 1気圧)	hPa または mmHg (760mmHg = 1013hPa = 1気圧)
p.176	図18-3の参考	* 2. 胆のう管 * 4. 胆管とすい管の融合	* 2. 胆のう管 * 4. 胆管とすい管の融合
p.181	Visual Studyの図上囲み	細尿管(腎細胞)	細尿管(腎細管)
p.181	Visual Studyの図(赤い囲み)	「輸入細動脈」と「輸出細動脈」の文字を入れ替える。	
p.183	表19-1	「水」を有機物の区分から外す。(地の色の黄色を白にする)	
p.185	(8)の4行目	パラアミノ馬尿酸は、再吸収と追加排出により、	パラアミノ馬尿酸は、ろ過と追加排出により、
p.191	①の(3)の※の文中	「拡張と縮小」	「拡大と縮小」
p.210	③の参考の3行目	非酵素的に安全的に結合	非酵素的に安定的に結合
p.217	表23-2「NK細胞」参考の文	「主に血管内に存在するが、肝臓・腸管・脳内の血管ではその周囲にも存在する。」に変更する。	
p.217	表23-2の下の※	多数の顆粒をもつリンパ球であり、	多数の顆粒をもつ白血球であり、
p.221	田部の裏づけの文中	(Bursa Fabricius)	(Bursa of Fabricius)
p.225	田部の裏づけの表内	マクロファージの存在部位: 心臓・リンパ節	マクロファージの存在部位: からだの各組織
p.227	2の(1)の文中	情報伝達物質 (※ p.74, 75)	情報伝達物質 (※ p.77)
p.229	図25-3の参考の3.	侵入に抗原と特異的に反応	侵入した抗原と特異的に反応
p.239	表26-2の「血清療法」の「目的・内容」の文中	動物につくらせた抗体(血清)を注入し、	動物につくらせた抗体を含む血清(抗血清)を注入し、
p.241	(4)の①の文中	O型のヒトの血しょう中の凝集素βにより	O型のヒトの血しょう中の凝集素αにより
p.246	④の(1)の文中	反応前の物質のエネルギーの総和は反応後の物質のエネルギーの総和も変化する。	反応系に含まれる物質のエネルギーの総和も変化する。
p.249	③の(1)の文中(3~4行目)	約30J 約13J/mol 約300J/mol	約30kJ 約13kJ/mol 約300kJ/mol
p.249	③の(1)の参考の文中	約30 ~ 42J/molと幅がある。	約30 ~ 42kJ/molと幅がある。
p.249	③の(3)の3~4行目	3-ホスホグリセリン酸に分解される際に	3-ホスホグリセリン酸に分解される際に
p.264	(3)の式2	$v = \frac{v[S]}{K_m + [S]}$	$v = \frac{V[S]}{K_m + [S]}$
p.264	(5)の文中	vやK _m の値は実験によって求める。ある酵素xのvとK _m を	VやK _m の値は実験によって求める。ある酵素xのVとK _m を
p.264	(6)の文中(最後の文)	また、vの値が不明なので、K _m の値もわからない。	また、Vの値が不明なので、K _m の値もわからない。
p.264	図2の文字	グラフの縦軸: v, xの値: $\frac{v}{2}$	グラフの縦軸: V, xの値: $\frac{V}{2}$
p.265	(8)の式3	$\frac{1}{v} = \frac{K_m}{v} \cdot \frac{1}{[S]} + \frac{1}{v}$	$\frac{1}{v} = \frac{K_m}{V} \cdot \frac{1}{[S]} + \frac{1}{V}$
p.265	(9)の文中(8行目)	交点(切片→)は $\frac{1}{v}$ を表し、	交点(切片→)は $\frac{1}{V}$ を表し、
p.265	図4のオレンジ線と縦軸との交点の数式	$\frac{1}{v} = 2.0$ より v = 0.5	$\frac{1}{V} = 2.0$ より, V = 0.5

ページ	該当項目	誤	正
p.265	図4の水色線と横軸との交点の数式	$-\frac{1}{K_m} = -0.77$ より $K_m = 1.3$	$-\frac{1}{K_m} = -0.6$ より $K_m = 1.7$
p.265	表4右下の欄	非競争的な阻害物質を加えた	非競争的な阻害物質を加えた
p.266	図Bの上の文	このATCアーゼの反応速度(V)と	このATCアーゼの反応速度(v)と
p.271	(2)の①の文中	(グリセルアルデヒド)	(グリセルアルデヒド リン酸)
p.271	図30-1の右上	ピルビン酸(C ₃ H ₄ O ₃)	ピルビン酸(C ₃ H ₄ O ₃)
p.272	④の(3)の文中	以下の①~⑤と右ページの図30-3	以下の①~④と右ページの図30-3
p.272	④の(3)の④の参考	⑤の反応でGTP(Guanosin	④の反応でGTP(Guanosin
p.273	③の参考の文中	膜を隔てたH ⁺ の浸透)により	膜を隔てたH ⁺ の浸透)により
p.273	図30-3	クエン酸回路内の③を②に, ④を③に, ⑤を④にそれぞれ変更。	
p.277	②の6行目	細胞外(細胞膜と細胞膜の間)	細胞外(細胞壁と細胞膜の間)
p.277	表30-2の参考の文中	クエン酸回路では2ヶ所	クエン酸回路では3ヶ所
p.279	②の参考の図内	β位のCの	β位のCと
p.280	(4)の③の参考の2.の文中	呼吸商は $\frac{O_2}{CO_2}$ の体積比または	呼吸商は $\frac{CO_2}{O_2}$ の体積比または
p.283	下部の表内	クエン酸 (HOOC(CH ₂) ₂ COOH)	クエン酸 (C(OH)(CH ₂ COOH) ₂ COOH)
p.285	図32-1の右上	2NADH+H ⁺	2NADH+2H ⁺
p.286	図32-2	ピルビン酸の脱炭酸で生じるもの: CO ₂ アセトアルデヒドの炭素: 2(C ₂) エタノールの炭素: 2(C ₂)	ピルビン酸の脱炭酸で生じるもの: 2CO ₂ アセトアルデヒドの炭素: 2(C ₂) エタノールの炭素: 2(C ₂)
p.296	(2)電子伝達の②の文中	24H ⁺ が生じる(12NADP ⁺ +24e ⁻ +24H ⁺ → 12NADPH+24H ⁺)。	12H ⁺ が生じる(12NADP ⁺ +24e ⁻ +24H ⁺ → 12NADPH+12H ⁺)。
p.296	(2)電子伝達の③の文中	水の分解で生じた 2e ⁻	水の分解で生じた 24e ⁻
p.300	表33-1内の図上部	「NADP ⁺ 還元酵素」に入っていく「12H ⁺ 」を「24H ⁺ 」に変更。	
p.300	表33-1内の「カルビン・ベンソン回路」	C_3 (PGA)	12 C_3 (PGA)
p.300	表33-1内「電子伝達」の「概要」欄	O ₂ と NADP + H ⁺ の生成。	O ₂ と NADPH + H ⁺ の生成。
p.301	田部の裏づけの表	(アミロース・アミロペクチン)	(アミロース・アミロペクチン)
p.303	(7)の最後の文中	見かけの光合成速度の値から呼吸速度の値を引いて	見かけの光合成速度の値と呼吸速度の値を足して
p.307	(3)の最後の文中	(図34-6)	(図34-5)
p.307	図34-5	カルビン・ベンソン回路内の囲みが付いていないC ₃ を	C_3 に変更(2箇所)。
p.308	(7)の文中	図34-6の③のように大気中で	図34-6に示すように低CO ₂ 濃度下で
p.309	表34-2の「C ₃ 植物」の「模式図的理解」欄	カルビン・ベンソン回路の図の下部の文字: C ₃	カルビン・ベンソン回路の図の下部の文字: C ₅
p.310	もっと広く深く(2)の6行目	オキシゲナーゼ(分子状の酵素(O ₂))を	オキシゲナーゼ(分子状の酸素(O ₂))を
p.311	(3)の最後の文	経路は, 右図に示す光呼吸の経路では	経路は, 右図に示す。光呼吸の経路では
p.311	(3)の最後の文	強光下の光合成で多量に発生した酵素とATP	強光下の光合成で多量に発生した酸素とATP
p.311	光呼吸の経路の模式図「葉緑体」の右側	2×ホスホグリコール酸	2×ホスホグリコール酸
p.312	Visual Studyの④	「光合成では, O ₂ はH ₂ Oがなくても……」「そして, O ₂ はCO ₂ の分解で……」	「光合成では, O ₂ はCO ₂ がなくても……」「そして, O ₂ はH ₂ Oの分解で……」
p.316	⑦の(3)の参考の文中の放射性同位元素	¹¹ C (全3個) ¹⁴ C (全2個)	¹¹ C (全3個) ¹⁴ C (全2個)
p.316	⑦の(3)の参考の5行目	トレーサーとしてはあまり	目印(トレーサー)としてはあまり
p.316	⑦の(3)の参考の6行目	第二次世界大戦が集結した	第二次世界大戦が終結した
p.322	図336-3の葉の中の④の下と⑤の上	NO ₃ ⁻	NO ₂ ⁻
p.323	⑥の図のグルタミンの化学式	真ん中のCH ₂ の上下に付いているHとNH ₂ を、右隣のCの上下に移動する。(⑦の左上のグルタミンと同じ)	
p.324	(6)の1つ目の参考	化学的には酸アミドに属する中性アミノ酸	化学的には酸性アミノ酸
p.326	4「脱窒」の3行目	脱窒素細菌という(※p.667)。	脱窒素細菌という(※p.666)。
p.331	もっと広く深く5~6行目	A-T間より結合力が強いG-C間ほの、	G-C間はA-T間より結合力が強いので、
p.332	(1)の5行目	DNAの複製が終了すると、	DNAの複製が終了し、
p.332	田部の裏づけの文中	細菌中のプラスミド(※p.577)	細菌中のプラスミド(※p.576)
p.333	(3)の文中	この他に、プラスミド(※p.577)	この他に、プラスミド(※p.576)
p.340	④の(1)	紡錘糸は消える。	紡錘糸は消える。
p.344	(3)の文	¹⁵ N培地に移す前に、	¹⁴ N培地に移す前に、
p.344	(4)の文	0世代は軽いDNAのみ、1世代は中間の重さのDNAのみ、2世代は中間の重さのDNAと重いDNAが	0世代は重いDNAのみ、1世代は中間の重さのDNAのみ、2世代は中間の重さのDNAと軽いDNAが
p.349	図39-6の中央部	DNAリカーゼ	DNAリガーゼ
p.360	もっと広く深く①(1)④	「ゲノム」の参照ページを「p.414」に変更する。	
p.362	~403右端のインデックス	第6章	第7章
p.366	1の(3)の参考の2.	原核生物のすべてのRNA前駆体	原核生物に属する細菌のすべてのRNA前駆体
p.369	もっと広く深くの図	宿主のDNAポリメラーゼによる転写	宿主のRNAポリメラーゼによる転写
p.375	②の文中(1行目)	p.412(c)のとおりであり	p.374③のとおりであり
p.380	表42-4の真核生物の細胞内の模式図右下	アミノ酸9個からなるポリペプチド	アミノ酸8個からなるポリペプチド

ページ	該当項目	誤	正
p.400	図44-9	(調節) 遺伝子 C から(調節) 遺伝子 A に向かう破線矢印を (調節) タンパク質 C から(調節) 遺伝子 A に向かうように変更。	(調節) 遺伝子 F から(調節) 遺伝子 A に向かう破線矢印を (調節) タンパク質 F から(調節) 遺伝子 A に向かうように変更。
p.402	もっと広く深く表題	DNA のメチル化 (≪p.501)	DNA のメチル化 (≪p.395)
p.410	表内の左列	(1) グルコース (有) ラクトース代謝接物 (有) (2) グルコース (有) ラクトース代謝接物 (無) (3) グルコース (無) ラクトース代謝接物 (無) (4) グルコース (有) ラクトース (有)	(1) グルコース (有) ラクトース (有) (2) グルコース (有) ラクトース (無) (3) グルコース (無) ラクトース (無) (4) グルコース (有) ラクトース (有)
p.410	表内(1)の図の左下	ラクトース代謝接物	ラクトース代謝産物
p.417	表46-6の左下の「前期」	中心体の分裂が起こる(動物のみ)。	中心体の複製が起こる(動物のみ)。
p.418	表46-7の「細胞当たりのDNA量の変化」	減数分裂: 図46-3の① 体細胞分裂: 図46-3の②	減数分裂: 図46-3の② 体細胞分裂: 図46-3の①
p.420	⑨の(5)の文中	組換えが起こる (≪p.439)	組換えが起こる (≪p.438)
p.439	図48-3の一番下の行	81 [AB] 1 [Ab] 1 [aB] 81 [ab]	81 [AB] 9 [Ab] 9 [aB] 81 [ab]
p.440	(1)の文中	独立、連鎖、連鎖のそれぞれ	独立、連鎖のそれぞれ
p.441	田部の裏づけの(2)	[連鎖乗換えありの場合] 19 : 1 : 1 : 19	[連鎖乗換えありの場合] 9 : 1 : 1 : 9
p.441	ページ下の参考	図48-4のように、	田部の裏づけの(連鎖の場合) ②の図のように、
p.445	図48-10	1の上から2つ目の「半透明暗赤色眼」を削除する。	
p.446	(1)の文中(4行目)	幼虫のだ腺細胞(だ腺細胞)	幼虫のだ腺細胞(だ腺細胞)
p.455	図49-6の右上	3つある「子宮」のうち、左右の2つ(輸卵管より下にある2つ)を「卵巣」に変更する。また、「(受精卵)が発生するための器官」という説明を、残った上の「子宮」の近くに移動する。	
p.460	(7)の文中	(図50-4 3)	(図50-3 ④)
p.469	11の(2)の参考	カエル(無尾両生類)の	カエル(無尾両生類)の
p.470	右下の図	図の下に「図51-1 神経堤細胞の移動経路」という題を加える。	
p.470	右下の図の右上	(感覚ニューロンの細胞膜)	(感覚ニューロンの細胞体)
p.473	原腸胚中期の表面図	この辺の■(中胚葉の側枝予定域)は原口のこのあたり(原口背唇)からもぐり込む	この辺の■(中胚葉の側枝予定域)は原口のこのあたり(原口腹唇)からもぐり込む
p.473	原腸胚中期の断面図	■は原口のこのあたり(原口背唇)から	■は原口のこのあたり(原口腹唇)から
p.481	図52-5の右上	原腸(初期)	原腸胚(初期)
p.486	(1)の図の文中	(図52-13)	(図52-12)
p.491	(1)の3~4行目	スジモリの予定表皮域とクシモリの予定神経域の(特徴化・個性化・得異化)	スジモリの予定神経域とクシモリの予定表皮域の(特徴化・個性化・特異化)
p.497	(1)の1行目	しかし、ラッキング鎖の5'末端に	しかし、ラッキング鎖の3'末端に
p.510	図54-7の①(左上)	胚盤腔(胞胚空)	胚盤腔(胞胚腔)
p.510	図54-7の下部の参考内	柔毛(絨毛)	柔毛(絨毛)
p.513	1の(1)の文中	特定の時期に形成される。生殖器官である花	特定の時期に形成される生殖器官である花
p.517	もっと広く深く①の表	水の移動や原形質連絡が起こる。	水の移動が起こる。
p.522	①の参考	基部側(珠孔側)も液胞を発達	基部側(珠孔側)に液胞を発達
p.522	②の1行目	基部細胞は胚のう(母体植物)に接しており	基部細胞は胚珠(母体植物)に接しており
p.522	②の参考	胚球を胚のうの中央に押し出す	胚球を胚のうの中央に押し出す
p.522	③の参考	(頂端分裂組織由来の細胞と、基部組織由来	(頂端細胞由来の細胞と、基部細胞由来
p.524	③の①	極核(DNA量1)2個と受精して、	極核(DNA量1)2個と融合して、
p.528	①の図の下部	根・冠	根冠
p.537	2の(3)の文中	実体(本体)がETタンパク質	実体(本体)がFTタンパク質
p.544	(3)の文章	「セルロース繊維が横方向(茎に垂直)に並んでいる場合には、セルロース繊維が縦方向(茎に水平)に並んでいる場合には、セルロース繊維間が離れると細胞は伸長成長し、セルロース繊維間が離れると細胞は肥大成長する。」に変更する。	「セルロース繊維が横方向(茎に垂直)に並んでいる場合には、セルロース繊維間が離れると細胞は伸長成長し、セルロース繊維間が離れると細胞は肥大成長する。」に変更する。
p.544	(5)の文中	茎に水平に並ぶように	茎に垂直に並ぶように
p.544	(6)の文中	茎に垂直に並ぶように	茎に水平に並ぶように
p.544	エチレン・サイトカニン		エチレン・サイトカニン
p.545	②の1の(2)	寒天片Aが置いた	寒天片Aを置いた
p.546	もっと広く深くの図	DIN タンパク質	PIN タンパク質
p.546	もっと広く深くの図	IAA* となっている3つをIAAに直す	
p.546	もっと広く深くの図	②を削除して③を②に変える	
p.546	もっと広く深く最終行	常に細胞外に排出・供給されている(図2)。	常に細胞外に排出・供給されている(図②)。
p.548	①の3~4行目	AUX1 タンパク質 (≪p.545)	AUX1 タンパク質 (≪p.546)
p.553	ブリグスの実験	光側の寒天片を置いた方が陰側の寒天を置いた方より屈曲した。	陰側の寒天片を置いた方が光側の寒天片を置いた方より大きく屈曲した。
p.555	(2)の最終行	分化する過程花芽形成という。	分化する過程を花芽形成という。
p.567	(5)の文章	文章中で挙げられている例のうち「チューリップの花」を削除する。	
p.567	表60-2胚圧運動の傾性	就眠運動…マメ科植物の葉、チューリップの花	マメ科植物の葉などの就眠運動

ページ	該当項目	誤	正
p.570	(2)～(4)の図の指示番号	図 60-10② 図 60-10③ 図 60-10④ 図 60-10⑤	図 60-12② 図 60-12③ 図 60-12④ 図 60-12⑤
p.571	表60-3 フィトクロム	光発芽 545 暗発芽 546	光発芽・暗発芽 540 莖の伸長成長の抑制 545
p.571	表60-3 クリプトクロム	伸長成長の抑制 535 暗所での芽や葉の形態形成 546 生物時計の制御 571	伸長成長の抑制 545 暗所での芽や葉の形態形成 545 光周性に関与 562
p.571	表60-3 クリプトクロム	シロイヌナズナには3種類 (cry 1～3)	シロイヌナズナには2種類 (cry 1と2)
p.586	Visual Study上部	化学構造式内の O の上についている + を削除 (3つ)	
p.588	2の2行目	病気の原因となる遺伝病を	病気の原因となる遺伝子 (の塩基配列) を
p.603	参考の6行目	生存個体数を表すグラフ	生存個体数を対数目盛で表すグラフ
p.604	図63-9の安定型	幼若期に比べて出生率が低く、	幼若型に比べて出生率が低く、
p.605	(1)と(2)の文中	幼若型の個体	幼若期の個体
p.632	図65-14の左下	岩礁表面の藻類を捕食	岩礁表面の藻類を摂食
p.643	表66-3の二年生植物	(ここに、越年性植物を	(ここに、越年生植物を
p.643	表66-3の多年生植物	ブナ・ミズナラ (葉落性)	ブナ・ミズナラ (落葉性)
p.648	(3)の文中	(バイオニア植物) という ^{※2} 。	(バイオニア植物) という。
p.648	(3)の※3	根に根粒菌を共生させ、根粒菌から	根に共生させた細菌 (≡ p.325) から
p.649	参考の2. の最終行	多年生草木へと変わっていく。	多年生草木へと変わっていく。
p.664	⑤の文中	消費者に捕食される。	消費者に取り込まれる。
p.671	図69-2の左上	ふ化	羽化
p.672	図69-3の左下	オオアシシギなどに摂食される	オオアシシギなどに捕食される
p.673	④の文中(10行目)	硫酸細菌などの化学合成細菌	硫黄細菌などの化学合成細菌
p.679	7の(4)の参考の文中	生産者 (植物プランクトン) 0.04ppm	生産者 (植物プランクトン)・動物プランクトン 0.04ppm
p.679	図69-11	水中 0.00003	水中 0.000003
p.684	②の参考の1. の文中	Trade in Endangered Species	Trade in Endangered Species
p.685	2の①の例	アツモリソウ (種子動物) など	アツモリソウ (種子植物) など
p.690	図70-1	有機物含んだ水	有機物を含んだ水
p.698	田部の裏づけ(6行目)	ストマトライトをつくり、	ストロマトライトをつくり、
p.699	上部の参考の1.	(半自立的増殖という)。	(半自律的増殖という)。
p.701	(2)の参考の文中	約23億年前に1回と、約7億～6億年前に2回あったと	約23億年前と、約7億～6億年前の2回あったと
p.701	図71-2の左上	カルニア (体長約10cm)	カルニア (体長約15～200cm)
p.704	(3)の文中	(図71-7③)	(図71-6③)
p.704	図71-6の上部	背側と腹側を分ける縦断面図	背側と腹側を分ける縦断面図
p.705	(1)の文中	最初の陸上生物である両生類	最初の陸上動物である両生類
p.707	図72-2の吹き出し	蘆木 (「ロボク」と呼ばれている)。	蘆木 (「ロボク」と呼ばれている)。
p.709	②の(2)の文中	古生代白亜紀末に大形爬虫類	中生代白亜紀末に大形爬虫類
p.710	図72-4の下部	[ペルム期の終わり] [ジュラ期の終わり] [白亜期の終わり] [第四期 (現世)]	[ペルム紀の終わり] [ジュラ紀の終わり] [白亜紀の終わり] [第四紀 (現世)]
p.716	図72-10のホモ・エレクトス	(脳容積 800～140cm ³ /身長 1.6～1.8m)	(180万～5万年前/800～1200cm ³ /身長 1.6～1.8m)
p.720	図37-1	メンヒップス	メンヒップス
p.728	ピンク囲みの④の※	集団間遺伝子の交換	集団間で起こる遺伝子の交換
p.729	表74-1の下の方4行目	2 × p ² = 2b ² であり、	2 × q ² = 2q ² であり、
p.729	qの数式内	$= \frac{b}{p+q}$	$= \frac{q}{p+q}$
p.739	(4)の1行目	ホックス遺伝子群 (≡p.524)	ホックス遺伝子群 (≡p.498)
p.739	⑨の(2)の2行目	滅かしか分子進化	滅ししか分子進化
p.742	Visual Study下部	<i>Panthera tigre</i>	<i>Panthera tigris</i>
p.747	田部の裏づけの参考	Taq DNAポリメラーゼは、	Taq DNAポリメラーゼは、
p.747	④の1の①	からだの構造体制が簡単で	からだの構造(体制)が簡単で
p.754	2の(1)3行目	(2m)となり(図73-1②)。	(2m)となり(図76-1②)。
p.757	図76-4の真ん中	胚孔	珠孔
p.764	軟体動物の図の番号	図77-9 軟体動物の構造	図77-7 軟体動物の構造
p.765	図77-9の左側	ワムシ (袋形動物) の成体	ワムシ (輪形動物) の成体
p.768	表内「体腔」の項目	扁形動物門: 偽体腔 輪形動物門: 無体腔	扁形動物門: 無体腔 輪形動物門: 偽体腔
p.768	表内「循環系」の項目	線形動物門: 開放血管系	線形動物門: なし
p.769	昆虫類の排出物質	アンモニア	尿酸
p.769	表内「神経」の項目	頭索動物亜門と尾索動物亜門: 中脳進化	頭索動物亜門と尾索動物亜門: 脳未発達
p.769	無顎上綱の卵割	盤割	全割・盤割
p.769	爬虫綱の器官	(中腎)	(後腎)
p.769	爬虫綱の神経	小脳はやや発達	小脳が未発達

【第2版】のみの修正箇所

ページ	該当項目	誤	正
p.372	②の2(6)の文中	(4)～(6)の過程の……(4)～(6)の詳細は≡p.374)。	(3)～(5)の過程の……(3)～(5)の詳細は≡p.374)。

読者の皆様には多大なご迷惑をおかけして誠に申し訳ありません。訂正してお詫び申し上げます。